

ダンス授業での学修成果がジェネリックスキルに 及ぼす影響

谷 本 英 彰[†]

The Influence of Learning Outcomes to Generic Skills in Dance Lesson

TANIMOTO Hideaki[†]

Abstract

The purpose of this study was to examine how contribute the dance lesson to the generic skill which is cultivated through university education. To explore the contribution the dance lesson to the skill, using quantitative data and qualitative data.

In the case of using quantitative data, the result indicate that “understanding” and “involving oneself with other” which is subscales of learning outcomes in dance lesson, positively effect to the general foundation in interpersonal and personal skills. Equally, in the case of using qualitative data, the result indicate that the learning outcomes contribute to cultivate the communication skills and independence.

The results of this study conclude that dance lesson contribute to cultivate the general foundation in interpersonal and personal skills.

キーワード：大学教育，大学体育，コミュニケーションスキル，テキストマイニング

目 的

近年、大学入学志願者のほとんど全員が大学入学を果たすことのできる「大学全入時代」を迎え、大学生の学力低下等の課題が叫ばれる中で、大学が教育現場として求められる役割は変化してきている。グローバル化が進展する変化の激しい社会の中で生き抜く手立てとして、コミュニケーション能力、論理的思考力、自己管理能力など、どのような場面においても転移可能能力であるジェネリックスキルが必要不可欠であり、この能力を大学教育

[†] 大阪産業大学 スポーツ健康学部スポーツ健康学科講師

草 稿 提 出 日 12月22日

最終原稿提出日 3月5日

において育むことが求められている（社会人基礎力に関する研究会，2006；中央教育審議会，2008；中央教育審議会，2011）。

このジェネリックスキルのうちチームワーク能力の向上を意図して、筆者は大学ダンス授業における創作活動に着目し、大学1年生を対象に、その効果を検証した。その結果、チームワーク能力の基盤となるコミュニケーション能力の一部を向上させる効果があり、ダンス授業における創作活動は初年次教育において重要な役割を担っていることを示唆した（谷本，2016）。この研究においては、上述したように、ジェネリックスキルの1要素であるチームワーク能力に焦点を当てており、ジェネリックスキルを包括的に検討されていない。大学教育は数多くの課内活動さらには課外活動によって構成されており、これらすべてを通じ、4年間をかけてジェネリックスキルを包括的に涵養していく。ダンス授業はそのごく一部であることから、ジェネリックスキルのうち、どのような資質や能力の涵養に寄与しているのかを明らかにし、今後の大学ダンス授業における授業研究の基盤となる資料を収集する必要がある。そこで、本研究では、大学ダンス授業における学修成果が大学生のジェネリックスキルのうち、どのような資質や能力の向上に寄与しているのかを検討することを目的とした。

ところで、これまでの大学ダンス授業における学修成果に関する研究の多くは量的データを用いた検証を主として行われており、質的データを用いたとしても量的データを補完するような位置づけで使用されてきた（例：細谷ほか2012；原田，2014；檜皮ほか，2017）。量的データに対して質的データは、回答者の詳細な意見を反映したデータが得られる可能性がある一方、分析者の主観が影響し、カテゴリー分類等の結果が異なるといった懸念が残されることや大量のデータを扱うには困難であるという問題が残されていた。しかし、それらの問題を解決する分析手法として比較的最近になり、テキストマイニングという手法が注目されつつある。

テキストマイニングとは、文章（テキスト）から有益な情報を発掘（マイニング）するための方法であり、自然言語処理の手法を用いて、文章を単語や句に分割し、単語の出現頻度や単語間の関係を統計的に解析することにより、文章から情報を抽出することが可能である（内田ほか，2012）。体育授業場面において、テキストマイニング分析を用いた研究報告は徐々に増加しており、例えば、西田ほか（2015）は大学体育授業に関するふりかえりを自由記述で回答させ、そのテキストデータを用いて大学体育授業における主観的恩恵について検討を行い、10カテゴリーを抽出している。また、奈良ほか（2017）は自身の所属する大学の体育授業における教育目標の肯定的認知度を受講生のふりかえり自由記述をもとに分析したところ、教育目標として示されているカテゴリーのうち、ほとんどにつ

いて肯定的に認知されているが、「解釈力・鑑賞力」についての認知度が低かったことから、今後はその点を踏まえた授業改善が必要であると考察している。その他にも水泳（大山ほか，2011），陸上競技（伊藤ほか，2011），バドミントン（平野，2015），ダンス（朴ほか，2017）など様々な教材における指導法や学修成果についての検討が行われている。さらに，大学体育授業場面だけでなく学校教員養成の保健体育指導場面（杵子ほか，2013；満武ほか，2016；角南ほか，2017；山口ほか，2017）や中学校・高等学校における体育授業場面（伊藤ほか，2011；内山ほか，2014；大矢ほか，2016）などその領域は多岐にわたる。このように，テキストマイニングは自由記述形式の質的データを用いて有益な情報を抽出し，量的データを用いた分析では明らかにできない，回答者の自由な言葉や文章から新たな知見を導き出せるという有用性から多くの研究で用いられつつある。しかし，大学ダンス授業においては，朴ほか（2017）がダンス授業履修者を対象にダンスのイメージについて調査したもののみであり，ダンスの学修成果をテキストマイニング分析によって質的に検討した研究は見当たらない。

以上を踏まえ，本研究では，大学ダンス授業における学修成果が受講生のジェネリックスキルにどのような影響をもたらすのかを量的データのみならず質的データも用いて検討することとした。

研究１ ダンス授業の学修成果とジェネリックスキルとの関連

方 法

対象者

関西地区の４年制私立大学において平成28年度前期に開講された「スポーツ科学実習（ダンス１）」を受講した大学生89名（男性51名，女性38名；１年生87名，２年生２名）を調査対象とした。そのうち，調査票への回答に記入漏れや二重回答のあるものを除外し，最終的に85名（男性50名，女性35名；１年生83名，２年生２名）を分析対象者とした。

授業内容

谷本（2016）と概ね同様の単元計画で授業を実施した。単元計画を表１に示す。本科目は，学科必修科目であるとともに教職必修科目として位置づけられており，ダンスの創作方法および創作ダンスの指導法を中心とする内容で構成されている。授業は，課題の設定および把握の後，グループに分かれて創作活動を行い，その後に互いの作品の発表と鑑賞という流れで進められた。創作グループは概ね５－６名で構成された。また，受講生が多くの者と触れ合う機会をつくるために創作グループは課題が変更されるたびに再編成され

表1 スポーツ科学実習（ダンス1）の単元計画

授業回数	授業内容
1	オリエンテーション「創作ダンスとは？」
2	ミラーリング：ものの動きを身体で表現する（2人組で創作）
3	リズムダンス：基本のステップの習得
4	基本のステップを使ったダンスの創作（5-6名で創作）
5	
6	日常動作をもとにしたダンスの創作（5-6名で創作）
7	フロア移動方法を意識したダンスの創作（5-6名で創作）
8	テーマに沿った即興表現（個人での創作）
9	自由テーマでのグループ作品の創作（5-6名で創作）
10	
11	中間発表
12	作品の修正（5-6名で創作）
13	
14	最終発表
15	VTRによる作品鑑賞と評価

たが、第9回目「自由テーマでのグループ作品の創作」からは、グループを固定して創作活動を実施させた。

調査内容

1) ダンス授業の学修成果

松本ほか（1996）の「ダンス授業評価尺度」を用いた。この尺度は、中学校における創作ダンスの授業を4つの観点（「おどる・つくる」「わかる」「かかわる」「とりくむ」）で評価するために作成されたものである。本研究の対象者は大学生であるが、本尺度が本研究で取り扱った授業の目標および内容を十分評価できることから本尺度を使用することは妥当であると判断した。回答形式は「全くあてはまらない（1）」から「非常によくあてはまる（7）」の7段階評定であった。

2) ジェネリックスキル

学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発したProgress Report On Generic

表2 PROGのテスト概要

	リテラシーテスト	コンピテンシーテスト
実施形態	選択式・記述式	選択式
問題数	30 問 (選択 28 問、短答記述 2 問)	両側選択方式 195 問 場面想定形式（短文） 50 問 場面想定形式（長文） 6 問 合計 215 問
実施時間	45 分	40 分
測定領域	(1)問題解決能力 情報収集力、情報分析力、 課題発見力、構想力 (2)言語処理能力、非言語処理能力	対人基礎力 対自己基礎力 対課題基礎力

PROG 白書（2015）より抜粋

Skills (PROG) を用いた。このテストではジェネリックスキルを「リテラシー」と「コンピテンシー」の両面から総合的に測定することができる。ここでいう「リテラシー」は「知識を活用して問題解決する力」, 「コンピテンシー」は「経験と積むことで身についた行動特性」と定義づけられている (PROG白書プロジェクト, 2015)。このテストに回答することにより, リテラシーを1～7の7段階, コンピテンシーを1～5の5段階で評価することができる。テスト概要および測定可能な能力は表2のとおりである。

調査方法

ダンス授業の学修成果については, 授業最終回終了後に調査を実施し, 授業担当教員が調査票を配布・回収した。回収率は100%であった。倫理的配慮に関して, 研究の目的の説明および得られたデータを集計以外に用いることはなく, プライバシーが保護されていることをフェイスシートに明記するとともに, 調査実施直前に口頭で伝達を行った。また, 調査への回答は自由意志であり, いつでも回答を中止できることを口頭で伝達した。

ジェネリックスキルの調査は, 1年生については初年次演習科目の授業内で, 2年生については担任教員によって, キャリア教育の一環として実施された。なお, 調査票の回収率は100%であった。

分析方法

まず、各変数の関連性を検討するためにピアソンの相関係数を算出した。そして、ダンス授業における学修成果がジェネリックスキルに与える影響を検討するためにPROGにおける「リテラシー」の総合評価得点および下位概念（「情報収集力」「情報分析力」「課題解決力」「構想力」「言語処理能力」および「非言語処理能力」）の評価得点、「コンピテンシー」の総合評価得点および下位概念（「対人基礎力」「対自己基礎力」および「対課題基礎力」）の評価得点を従属変数、ダンス授業評価尺度の得点を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。なお、これらの分析に際しては、IBM SPSS Statistics 21を使用した。

結 果

まず、各変数間におけるピアソンの相関係数を算出した（表3）。その結果、ダンス授業評価尺度のうち「わかる」を除くすべての下位尺度とリテラシーの「情報収集力」（「おどる・つくる」 $r=-.234$, $p<.05$ ；「かかわる」 $r=-.239$, $p<.01$ ；「とりくむ」 $r=-.265$, $p<.05$ ）および「課題解決力」（「おどる・つくる」 $r=-.283$, $p<.01$ ；「かかわる」 $r=-.271$, $p<.01$ ）に有意な負の相関が認められた。また、ダンス授業評価尺度のすべての下位尺度とコンピテンシーの総合評価（「おどる・つくる」 $r=.310$, $p<.01$ ；「わかる」 $r=.421$, $p<.01$ ；「かかわる」 $r=.315$, $p<.01$ ；「とりくむ」 $r=.415$, $p<.01$ ）および下位概念のうち対人基礎力（「おどる・

表3 各変数間の相関

	変数	おどる・ つくる	わかる	かかわる	とりくむ	リテラシー						コンピテンシー				
						総合評価	情報 収集力	情報 分析力	課題 解決力	構想力	言語処理 能力	非言語処理 能力	総合評価	対人 基礎力	対自己 基礎力	対課題 基礎力
ダンス 授業 評価	おどる・つくる		.783**	.821**	.786**	-.195	-.234*	-.134	-.283**	-.116	-.077	-.186	.310**	.323**	.256*	.056
	わかる			.840**	.720**	-.181	-.198	-.134	-.200	-.130	-.161	-.088	.421**	.406**	.399**	.103
	かかわる				.814**	-.179	-.239*	-.041	-.271*	-.120	-.119	-.060	.315**	.296**	.251*	.143
	とりくむ					-.178	-.265*	-.038	-.200	-.103	-.181	-.106	.415**	.414**	.354**	.138
リ テ ラ シ ー	総合評価					.678**	.610**	.555**	.774**	.470**	.552**	-.306**	-.372**	-.296**		.034
	情報収集力							.330**	.298**	.516**	.365**	.417**	-.236*	-.268*	-.236*	-.032
	情報分析力								.205	.342**	.262*	.362**	-.198	-.191	-.196	-.043
	課題解決力									.292**	.328**	.304**	-.209	-.290**	-.114	.085
	構想力										.399**	.430**	-.235*	-.284**	-.233*	-.020
	言語処理能力											.228*	-.285**	-.445**	-.195	.041
	非言語処理能力												-.146	-.152	-.214*	-.028
コ ン ピ テ ン シ ー	総合評価													.890**	.815**	.455**
	対人基礎力														.676**	.233*
	対自己基礎力															.234*
	対課題基礎力															

N=85

* $p<.05$, ** $p<.01$

表4 ダンス授業評価を独立変数とした重回帰分析

	リテラシー							コンピテンシー			
	総合評価	情報収集力	情報分析力	課題解決力	構想力	言語処理能力	非言語処理能力	総合評価	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力
R (R ²)	.202(.041)	.271(.073)	.234(.055)	.313(.098)	.133(.018)	.246(.060)	.247(.061)	.499(.211)	.494(.244)	.491(.241)	.196(.038)
標準偏回帰係数 (β)											
おどる・つくる	-.109	-.063	-.273	-.285	-.029	.245	-.412	-.164	-.075	-.191	-.240
わかる	-.063	.054	-.263	.165	-.093	-.249	.007	.527 **	.498 *	.646 **	.000
かかわる	.002	-.075	.313	-.290	-.019	.139	.291	-.378	-.456 *	-.494 *	.220
とりくむ	-.048	-.194	.112	.141	.002	-.308	-.121	.472 *	.486 *	.441 *	.148

* p<.05, ** p<.01

つくる」 $r=.323$, $p<.01$ ；「わかる」 $r=.406$, $p<.01$ ；「かかわる」 $r=.296$, $p<.01$ ；「とりくむ」 $r=.414$, $p<.01$ ）および対自己基礎力（「おどる・つくる」 $r=.256$, $p<.05$ ；「わかる」 $r=.399$, $p<.01$ ；「かかわる」 $r=.251$, $p<.05$ ；「とりくむ」 $r=.354$, $p<.01$ ）の間に有意な正の相関が認められた。

次に、ダンスの学修成果がジェネリックスキルに及ぼす影響を検討するために、PROGにおける「リテラシー」の総合評価得点および下位概念の評価得点、「コンピテンシー」の総合評価得点および下位概念の評価得点を従属変数、ダンス授業評価尺度の得点を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。分析によって得られた重決定係数(R^2)および標準偏回帰係数(β)を示したものが表4である。重決定係数(R^2)の値は0.018-0.244の範囲であったことから、本調査において抽出されたダンス授業評価における4下位尺度の分散は、PROGの各総合得点および各下位概念の評価得点の分散の約1.8%-24.4%を説明していることを示した。また標準偏回帰係数(β)の値については、コンピテンシーの総合評価において「わかる」および「とりくむ」が有意な正の影響性を示した（「わかる」： $\beta=.527$, $p<.01$ ；「とりくむ」： $\beta=.472$, $p<.05$ ）。また、「対人基礎力」において「わかる」 「とりくむ」が有意な正の影響性を、「かかわる」が有意な負の影響性を示した（「わかる」： $\beta=.498$, $p<.05$ ；「とりくむ」： $\beta=.486$, $p<.05$ ；「かかわる」： $\beta=-.456$, $p<.05$ ）。さらに「対自己基礎力」において「わかる」および「とりくむ」が有意な正の影響性を、「かかわる」が有意な負の影響性を示した（「わかる」： $\beta=.646$, $p<.01$ ；「とりくむ」： $\beta=.441$, $p<.05$ ；「かかわる」： $\beta=-.494$, $p<.05$ ）。

研究2 テキストマイニングによるダンス授業の学修成果の抽出

方 法

対象者

研究1と同様の者を調査対象者とした。調査票への記入内容を確認したところ、記入漏れのある者がいなかったため、調査対象者である89名（男性51名、女性38名；1年生87名、

2年生2名)のテキストデータを分析対象とした。

調査内容

対象者に受講したダンス授業の全般をふりかえりを行ってもらい、そこで得られた学修成果について、自由記述による回答を求めた。具体的には、「ダンスの授業を受講して、学んだこと、自分自身が成長したと思うこと」について記述するよう教示した。また、記入に際して特になしという記述は避けるように教示を与えた。

分析方法

まず、各対象者から得られたダンス授業の学修成果に関する自由記述のうち、学修成果について複数の記述が認められる場合は、その意味を損なわないように留意しながら文章を区切り、1つの内容につき1つのテキストデータとなるよう修正した。続いて、形態素解析を行った。形態素解析は、文字列を文法的に意味のある単位の構成要素に分割し、各要素の文法的素性を決定する手法である。なお、自由記述は同じ意味をあらわす言葉でも漢字、ひらがな、カタカナなどの表記ゆれや、コンピューターに入力する際の変換ミスが生じたりすることも多く、単純に自由記述をテキストマイニングしても質の高い結果が得られにくいとされている。このことから、本研究では形態素分析の結果を確認し、表記ゆれ等の不統一な表現があった場合、類義語登録を行い、それを反映させた形態素解析を再度実行するという作業を繰り返し行った。そして、形態素分析に続き、係り受け解析を実施した。係り受け解析とは、同じ1文内に出現しているだけでなく、そこに「係る語」と「受ける語」の関係が成り立っているかどうかについて分析する手法である(川嶋, 2012)。なお、これらの分析に際しては、テキストマイニングツールSPSS Text Analytics for Surveys 4.0Jを使用した。

結 果

得られた自由記述数は対象者1人につき1個から4個までであり、総計251個であった。それらから適切でない記述を削除し、最終的に分析対象とした自由記述数は総計248個となり、対象者1人あたり平均2.76個の記述が得られた。

これらの自由記述に対して、形態素解析を行った結果、614語のキーワードが得られた。ここから、質問文に含まれる語(「ダンス」「授業」「ダンス授業」「成長」「成長した」)、単独では明確な意味を持たない単語(「なる」「いる」「ある」「そして」「から」「ない」)、文脈から分析上不要と考えられる語(「大学」「大学の授業」)を不要語辞書に含め、それ

らを除外した上で再度、形態素分析を行ったところ、最終的に567語が得られた。これらのうち、先行研究（内山ほか，2014；西田ほか，2015；朴ほか，2017）に準拠して、出現率が5%以上にて出現した語を本研究における主要な形態素として表5に示した。最も出現率の高かった語は「できる（27.0%）」であり、「仲間（23.8%）」、「自分（19.8%）」、「意見（18.5%）」、「学ぶ（10.5%）」、「つくる（10.5%）」、「グループ（10.5%）」、「感じる（9.7%）」、「考える（9.7%）」、「協力（8.5%）」、「作品（8.5%）」、「楽しい（8.5%）」、「良い（6.5%）」、「出し合う（6.0%）」、「難しさ（6.0%）」、「動き（5.6%）」、「恥ずかしさ（5.2%）」

表5 ダンス授業の学修効果に関する形態素の頻度および出現率

形態素	頻度	出現率
できる	67	27.0%
仲間	59	23.8%
自分	49	19.8%
意見	46	18.5%
学ぶ	26	10.5%
つくる	26	10.5%
グループ	26	10.5%
感じる	24	9.7%
考える	24	9.7%
協力	21	8.5%
作品	21	8.5%
楽しい	21	8.5%
良い	16	6.5%
出し合う	15	6.0%
難しさ	15	6.0%
動き	14	5.6%
恥ずかしさ	13	5.2%

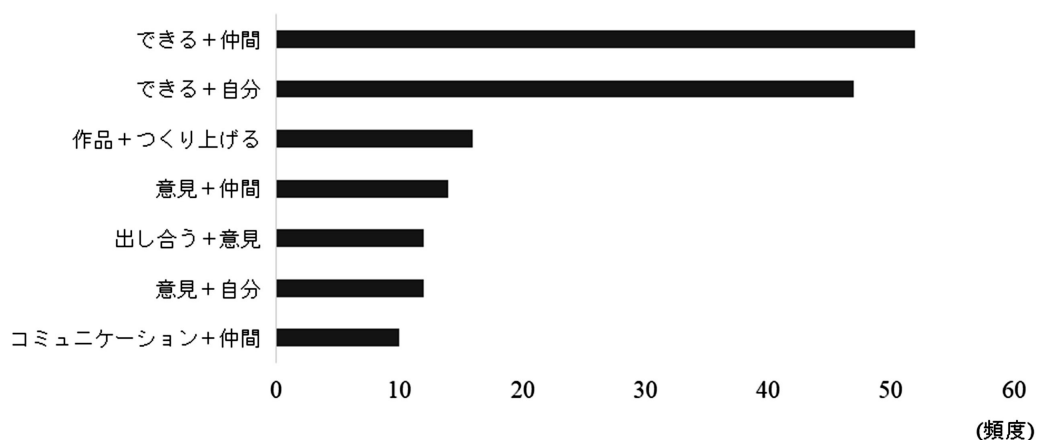


図1 ダンス授業の学修成果に関する係り受け解析結果

見 (18.5%)」,「学ぶ (10.5%)」など合計17語が出現した。

次に得られたキーワードについて係り受け解析を実施した結果, 頻度10以上を示した語を図1に示した。最も頻度が高かった語は「できる+仲間 (頻度52)」であり, 「できる+自分 (頻度47)」, 「作品+つくり上げる (頻度16)」, 「意見+仲間 (頻度14)」, 「出し合う+意見 (頻度12)」, 「意見+自分 (頻度12)」, 「コミュニケーション+仲間 (頻度10)」と合計7語が出現した。

考 察

本研究では, 大学実技科目として開講されているダンスの授業が大学教育において大学生のジェネリックスキル涵養に対し, どのように寄与しているのかを検討するために, 量的データおよび質的データの2種類のデータを分析し, 検証を行った。

まず, 大学ダンス授業での学修成果がジェネリックスキルにどのように寄与しているかについて, 量的データを用いて検討した。分析の結果, ジェネリックスキルのうちリテラシーについては有意な影響性は認められなかったが, コンピテンシーにおいて正または負の影響性が認められた。具体的には, ダンス授業内で「わかる」および「とりくむ」という点について学修成果を認知している者は, 対人基礎力および対自己基礎力が向上していた。一方, 「かかわる」という点について学修成果を認知している者は, 対人基礎力および対自己基礎力が低下する傾向が認められた。ダンス授業評価尺度の下位尺度である「わかる」は, 「友達の意見を取り入れられた」「いろいろな表現ができると思った」など, 創作した動きや表現を互いに鑑賞し合う活動を通じて, 動きや表現への認識を広げ深め, 良さを識別する力がつくこと意味している (松本ほか, 1996)。また, 「とりくむ」は, 「自分から進んで学習できた」「積極的に意見を出せた」など学習への主体的で意欲的な取り組みを意味している (松本ほか, 1996)。これらを踏まえ, 本研究で得られた知見をみると, ダンス授業内における創作活動など種々の活動の中で, 自ら積極的に意見を出したり, 他者を受け入れたりすることを通して, 他者との人間関係を構築し, とともに高め合う力 (対人基礎力) やストレスやプレッシャーのかかる場面でも状況を前向きにとらえ, 粘り強く行動する力 (対自己基礎力) が身についたといえる。これは, 筆者が実施した授業実践 (谷本, 2016) で得られた知見を支持するとともに, 対自己基礎力の向上という新たな知見を提示することができたといえる。

一方, ダンス授業を受講して, 「かかわる」という点において学修成果を認知しているにもかかわらず, 対人基礎力および対自己基礎力が低下していることが明らかとなった。

しかし、「かかわる」、対人基礎力および対自己基礎力の相関係数を確認してみると、3変数間には有意な正の相関が認められる。このことから、本研究で得られた重回帰分析の結果には多重共線性が疑われる。多重共線性とは、2つの独立変数間の相関が高い場合に引き起こされる現象で、分散共分散行列の逆行列が存在しなかったり、逆行列が計算できても、非常に誤差の大きいものになったりして、信頼性の低い重回帰式が求まることがある（石村、2008）一般的に独立変数間の相関係数が、 $r=.900$ 以上であれば多重共線性が疑われる。本研究における独立変数間の相関係数は.720-.821であり、非常に高いものではあったが、基準値を超えるものではなかった。また、多重共線性を確認する指標の1つであるVIF値を算出したところ、その値は3.74-5.31であり、一般的に多重共線性が疑われるとされる値（ $VIF>10$ ）を超えていなかった。しかし、これらの基準は絶対的なものではなく、研究者によって意見が分かれる。独立変数間の相関は、多重共線性が疑われる基準値ではなかったものの非常に高い相関関係にある。また、本研究の分析対象者は85名であり、サンプルサイズが小さい。今後、サンプルサイズを拡大して、詳細に検討を進めていく必要がある。

また、本研究では、量的データのみならず、質的データも用いてダンス授業の学修成果がジェネリックスキルに与える影響について検討した。係り受け解析の結果、「できる+仲間」や「できる+自分」といった係り受けの関係を持つ語が多く出現していた。これについては、例えば「それぞれが意見を出し合ったりしながら、みんな（仲間）でつくることができた。」「自分ができないと思っていたことができるようになった。」といったような記述がみられ、自分自身がまたは仲間とともに何かを成し遂げたことを実感していることが推察される。また、「意見+仲間」「出し合う+意見」「意見+自分」「コミュニケーション+仲間」といった係り受け関係を持つ語が出現したことから、他者と意見を交わしたり、自分の意見を出したり、コミュニケーションを図る能力や自ら情報を発信する主体性の向上を実感していることが明らかとなった。村田（2012）は、ダンス授業は他の運動領域とは異なり、「心身の解放」「身体による豊かなコミュニケーション」「いま・ここから創り出す問題解決学習（ゴールフリー学習）」という特性を持つとしている。本研究から得られた「作品+つくり上げる」という語が示すように、ダンス授業における創作活動は、テーマや表現方法を自ら考えるゴールフリー学習であり、その学習過程において言葉や身体表現を用いてコミュニケーションを図る中で、対人基礎力や対自己基礎力を涵養していった。これらの知見は、本研究における量的データの分析とも類似する結果であり、創作活動を主体とした大学ダンス授業は、大学教育においてコミュニケーション能力などの対人基礎力やプレッシャーやストレスのかかる困難な状況においても主体的に行動することのでき

る対自己基礎力の涵養に寄与することを示せたのではないだろうか。

最後に、本研究の課題について述べる。上述したように本研究のサンプルサイズは小さく、結果の汎用性については確証を得難いといえる。また、本研究では、ダンス授業の学修成果を独立変数、ジェネリックスキルを従属変数として取り扱ったが、横断的研究であるため、因果関係については言及できない。また、テキストマイニングについては、本研究では89名から251個のテキストデータを得て分析を行ったが、例えば西田ほか（2015）は、989名から2503個のテキストデータを得て、分析を行っており、本研究のサンプルサイズは小さいといえる。そのため、今後はサンプルサイズを拡大するとともに因果関係を明確にするために縦断的検証を実施していく必要がある。

文 献

- 中央教育審議会大学分科会（2008）学士課程教育の構築に向けて。 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm（2017年12月20日閲覧）
- 中央教育審議会（2011）今後の学校におけるキャリア教育・就業教育の在り方について（答申）。 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm（2017年12月20日閲覧）
- 原田純子（2014）創作ダンスの学習において培われる能力の特性について—社会人基礎力を手掛かりとして—。身体運動文化論攷，13：127-144.
- 平野泰宏（2015）体育教材としてのバドミントン指導法に関する一考察。大妻女子大学家政系研究紀要，51：47-56.
- 檜皮貴子・小島瑞希・椿ちか子・若井由梨・堀場みのり（2017）大学生を対象としたダンス授業の導入に用いる二人組のリズム系ダンスに関する研究：一時気分尺度と授業レポートより。新潟大学教育学部研究紀要，10（1）：233-244.
- 細谷洋子・田村典子（2012）創作ダンス授業における社会人基礎力育成についての一考察—問題解決学習の課題に着目して—。四国大学紀要，（A）37：77-90.
- 伊藤宏・大矢隆二・大田恒義（2011）大学生の50m走感想文のテキストマイニング。静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇，61：181-187.
- 伊藤宏・伊藤博子（2011）女子高校生の100m疾走後の感想文のテキストマイニング分析。静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇，42：291-297.
- 川嶋敦子（2012）言語の特徴を考慮したカテゴリ作成。内田治・川嶋敦子・磯崎幸子共著，SPSSによるテキストマイニング入門。オーム社：東京，26-51.
- 松本富子・高橋健夫・長谷川悦示（1996）子どもからみたダンス授業評価の構造—中学校創作ダ

- ンス授業に対する評価の分析から一. スポーツ教育学研究, 16(1): 46-54.
- 満武華代・大塚貴史・伊藤尋思・上島久明, 松尾博章 (2016) 保健体育科教育実習前後の授業実践に対する自信及び教科イメージの変化について. 至学館大学研究紀要, 50: 1-14.
- 杵子光一・柿山哲治・十河直太・家田重晴 (2013) 教育実習における体育の授業での工夫に関するテキストマイニングによる検討—自由記述の回答文の分析を通して—. スポーツ教育学研究, 33(2): 15-22.
- 奈良隆章・金谷麻理子・嵯峨寿・松元剛・木内敦詞 (2017) テキストマイニングによる大学体育授業の教目標に関する肯定的認知度分析. 大学体育研究, 39: 45-52.
- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・谷本英彰・福地豊樹・上條隆・鬼澤陽子・中雄勇人・木山慶子・新井淑弘・小川正行 (2015) テキストマイニングによる大学体育授業の主観的恩恵の抽出: 性および運動・スポーツ習慣の差異による検討. 体育学研究, 60: 27-39.
- 大矢隆二・伊藤宏・百瀬容美子 (2016) 中学生の投動作学習を通じた意識の変容: テキストマイニングによる分析. 常葉大学教育学部紀要, 36: 127-137.
- 大山康彦・天野秀哉・椿本昇三・齋藤まゆみ (2011) 大学生の持続泳における感性用語のテキストマイニング分析—動感身体知の形態発生に関わる様相について—. 茨城キリスト教大学紀要, 45: 261-273.
- 朴京眞・平山素子・寺山由美・図子美和・米澤麻佑子 (2017) ダンスの授業を選択した大学生のもつダンスのイメージのテキストマイニング分析—大学体育におけるダンス授業のあり方の検討—. 大学体育研究, 39: 29-44.
- PROG白書プロジェクト編著 (2015) 『PROG白書2015～大学生10万人のジェネリックスキルを初公開～』学校法人河合塾・株式会社リアセック監修, 学事出版株式会社.
- 角南良幸・高原和子・本山貢 (2017) 小学校教員養成課程の体育科における模擬授業効果—テキストマイニングによる自由記述形式の回答に対する検討—. 福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学, 3: 69-75.
- 谷本英彰 (2016) ダンス授業における創作活動がジェネリック・スキルに及ぼす効果—チームワーク能力に着目して—. 大阪産業大学人間環境論集, 15: 21-33.
- 内山須美子・阿久津隼佑 (2014) ダンス学習の楽しさに関するテキストマイニングによる分析. 白鷗大学教育学部論集, 8(1): 89-114.
- 山口莉葉・正田悠・鈴木紀子・阪田真己子 (2017) 体育科教員のダンス指導不安の探索的研究. 日本教育工学会論文誌, 41(2): 125-135.